

なか は ざ ま
中狭間遺跡 (本発掘調査B)

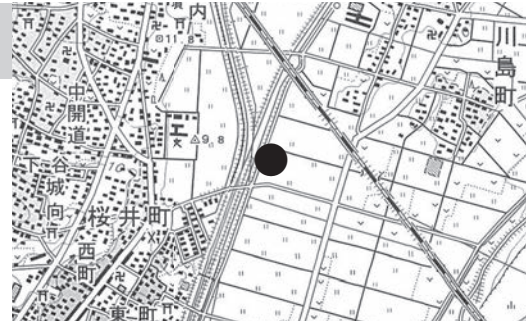
所在地 安城市桜井町・川島町地内
(北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒)

調査理由 中小河川改良事業 (一級河川鹿乗川)

調査期間 令和5年9月～令和6年1月

調査面積 1,550㎡

担当者 堀木真美子・河嶋優輝・池本正明



調査地点 (1/2.5万「安城」)

調査の経過 調査は愛知県建設部による鹿乗川改修工事伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じて委託を受けて行った。調査区は横断する農道と排水路を切り回す都合上、南から順に、23A区～23C区として設定された。

立地と環境 遺跡は鹿乗川流域遺跡群 (北群) の一部を構成し、亀塚遺跡の北側に接する。地形的には碧海台地東側縁辺に位置する沖積低地中の微高地で、地表面の標高は約 8.3m である。

調査の概要 本年度の調査区は、昨年度の調査区の西側に接する。検出された遺構は弥生時代中期後葉～弥生時代終末期、平安～鎌倉時代にまとまりが確認できる。

23A 区の主な遺構は、方形周溝墓 1 基と土器棺墓 4 基である。このうち、方形周溝墓である 0131SZ は、昨年度調査区で検出されている 22A 区 131SZ の西側部分に該当する。本年度の調査によりその全形を確認し、一辺約 11.0m の規模となる。北側が陸橋部となり、幅は約 1.5m をはかる。出土遺物は、弥生時代中期後葉と終末期に大きく二時期に区分できる。前者に構築され、後者に再構築されたものと考えられる。なお、北西溝中央部の基底部からは、弥生時代終末期の高杯数個体分の破片がまとまって出土しているが、杯部の内面に赤色顔料 (水銀朱) の付着が観察できる。また、土器棺墓 (0030SZ・0040SZ・0050SZ・0060SZ) は、いずれも弥生時代中期後葉で、0131SZ の南側に集中する状況が確認しており、土器棺墓の分布域が限定されている可能性も指摘できる。

23B 区の主な遺構は、方形周溝墓 3 基と溝 1 条となる。まず方形周溝墓から概観する。0130SZ は昨年度調査区で検出されている 22A 区 130SZ の西側に該当する。本年度の調査によりその全形を確認し、一辺 6m 程度のやや不整形な隅丸方形となる。西側が陸橋部となり、幅は 0.8m 程度をはかる。新たに確認された方形周溝墓は、0141SZ と 0150SZ で、前者は規模一辺 9.0m、後者は西側が調査区外へと伸びるが、一辺は 7.0m 程度と思われる。次に、0133SD は、後期前葉に掘削され、3 回程度掘り直されながら、終末期まで存在する溝で、幅 1.5m 程度となる。方形周溝墓群の中央を突き抜けて北西から南東へと伸び、北西端部は調査区外、南東は 22A 区を貫き調査区外へと伸びる。なお、0131SZ の北東溝と、0141SZ の南西溝がこれと接する。015SZ に近接した位置からは、ミニチュア土器がまとまって出土しており、特徴的となっている。

23C 区の主な遺構は、竪穴建物 4 棟を確認した。出土遺物は乏しく、いずれも時期は特定できないが、遺構の分布状況などは、東側に接する 22C 区と類似している。

なお、全ての調査区で幅 0.4～1.0m 程度の溝が 10 条程度確認されている。主軸は北西から南東となる。出土遺物は乏しいが、いくつかの溝から若干の山茶碗片が出土しており、おおむね平安～鎌倉時代に帰属するものと考えられる。

(池本正明)



23B 区 0141SZ(南から)



23A 区 0030SZ(西から)



23A 区 0050SZ(南から)

主要遺構の分布 (航空写真を合成) ▶

